

アドルフ・ヒトラー 最愛のリーダー



アドルフ・ヒトラー 最愛のリーダー

ヒトラーに関する8つの記事
そして
ヒトラーの7つの詩
より作成
戦いの呼びかけ
1990-1994

NSDAP/AO
私書箱6414

リンカーンNE 68506 米国

www.nsdapao.info & www.nsdapao.org

目次

はじめに

アドルフ・ヒトラーに関する記事

アドルフ・ヒトラーとは何者か

巡礼

クリスマス・ストーリー

4月20日

アドルフ・ヒトラー：自己犠牲の指導者

始まり

世界大戦におけるアドルフ・ヒトラー

告白

アドルフ・ヒトラーの詩

考えてみてくれ!

同志

それはアルトワの森の雑木林の中だった。

サイレント・ヒロイズム

パスウオークのヴァルデレン墓地

無線監視について

"青白黒赤"

はじめに

アドルフ・ヒトラーは確かに、どの国の指導者よりも最も愛されていた！

この愛が彼を成功に導いた。この成功が彼を敵に恐れさせた。この恐れのために、敵は毎年、10年、10年と彼を悪者にしてきたのだ。

愛は憎しみに負けることはない。真実が嘘では消せない。善は卑しさによって滅ぼされることはない。

いつか流れは変わるだろう...

ゲルハルト・ラウク
1999年10月(110)

アドルフ・ヒトラーとは？

マイケル・ストーム

アドルフ・ヒトラー総統は非常に優秀な人物だった。軍閥、政治指導者、創設者など、非常に困難な仕事を数多くこなした。私に言わせれば、最も重要視された戦争指導者という役割は、真のヒトラーではなかった。彼は1943年まで経済を総力戦に転換することを拒否し、それまではドイツは戦争と軍備の計画さえ持っていなかったが、これは戦争が強制されたことの表れである。)

確かに彼は優秀な政治指導者であり、行動的な政治家であったが、彼にとっては、それらはほとんど外面的なものにすぎず、まだ完全に満足させるものではなかった。ついに東部戦線の冬の危機の後、彼は完全に指揮官の役割に息を切れ、総統がそれを引き受けざるを得なくなった。

アドルフ・ヒトラーがその生涯を通じて持ち続けた内面性は、創造者であった。彼の誕生日にこの記事を書く意図は、この側面を取り上げることである。ユダヤ人メディアがそれらの敬愛する指導者に与えた否定的なイメージとは裏腹に、彼は本当は人類史上最も前向きで建設的な指導者だった。

10代の頃、彼は芸術家になることを夢見ており、フリーの芸術家としてささやかな生計を立てることさえできた。(英語版書籍リストの#082 『Adolf Hitler, The Unknown Artist』を参照)。ウィーン美術学校を受験したとき、彼は自分の本当の使命を知ることになる。学校は彼の願書を却下したが、彼の将来は建築にあるのだから、そこを受験すべきだと言った。しかし、彼の技術はあったが、父の死後すぐに学校を辞めたため、建築家になるための中途証明書を持っていなかった。

しかし、アドルフ・ヒトラーは生涯を通じて芸術家であり続け、家、スタジアム、橋を設計し、街全体を描き直した。これらの作品のひとつひとつに、彼の真の姿が刻印されている。その後、総統帝国の主任建築家として、アイデア、スケッチ、図面、模型を実現するのがアルベルト・シュペーの仕事となった。

総統が夢見たように、ドイツ全土に壮大な建物が建ち並んだ。総統の建築計画は1933年から1943年まで続いた！しかし、ドイツにはこの10年間で計画されたプロジェクトの何分の一かを完成させるだけの労働力と原料がなかった。ドイツの再軍備により、建築計画は1944年中止を余儀なくされた。1938年当時、フランスはドイツ帝国よりも多くの軍備費を費やしていた！1939年には、ヘルマン・ゲーリングがドイツ空軍に費やした資金よりも多くの資金がイギリスの空軍に費やされ、1940年にはフランスはドイツの2倍の近代戦車を保有していた！そしてこの2つ "平和を愛する" "民主主義国家は、人類が見たこともないような巨大な戦争で祖国を包囲した連合国軍の中で最も弱かった。にもかかわらず、アメリカ、ソ連、イギリスなどは、小さなドイツを打ち負かすのに丸6年もかかったのである。

総統にとって、高速道路や建物の建設、都市美化全般が最優先課題であったことは明らかだ。しかし、こうした巨大なプロジェクトでさえ、総統の内面性を十分に示すことはできない！

レニ・リーフェンシュタールの映画『意志の勝利』で印象的に見ることができるよう、アドルフ・ヒトラーは無名のまま第7代党員になると、すぐに運動を開始し、無名の分派政党を包括的な運動に変えた。総統の内なる意欲なしには、このようなことは起こらなかった。党を真の運動に変えるのは容易なことではなく、特に強大な敵に常に立ち向かわなければならなかったからだ。党の政治部門がついに数百万人の党員を数えたとき、総統はくつかの下部組織を創設し、個々の党員がそれぞれの授けられた任務を見つけられるようにした。最もよく知られているのはSS、SA、HJである。しかし、その

他にも労働者、農民、学生などを支援するもっと大きな組織が何十と存在した。その会員数はSAの200万人をも凌駕していた。総統の天才は、国民が国家的大義のために団結しなければならぬことを知っており、こうしたすべての組織が、かつてないほど、またそれ以来かつてないほど、人々を団結させ、結びつけた。

総統は、最悪の状況下で、世界史上最も包括的な運動を起こしただけでなく、ヨーロッパ最強の経済も作り上げた。総統が1933年1月30日に権力を掌握したとき、ドイツ経済は荒れ野原と化していた。失業率は25%、ライヒスマルクは無価値、国際貿易は世界恐慌によって不可能となり、イギリスはドイツの世界市場への参入を拒否した。オーストリアとの関税同盟さえ、不名誉なヴェルサイユ条約によって禁止されていた。要するに、ドイツは困窮し、敵対国からの保護主義の壁に囲まれていたのである。ドイツは永遠に経済奴隷であり続けることになった。さらに追い打ちをかけるように、ニューヨークを拠点とする世界のユダヤ人がナチス・ドイツに宣戦布告した（1933年3月！）。ニューヨークを拠点とする世界ユダヤ人は、ナチス・ドイツに宣戦布告したのだ（1933年3月！）。世界的なボイコットを呼びかけ、ユダヤの全財産と世界中の政治的コネクションを利用した。

しかし、この指導者は、一見絶望的とも思える課題に直面しても、感心することはない。躊躇することなく、無軌道な国家の指導権を握り、新しい国民経済を建設するという至難の業を開始した。総統は驚異的なスピードで、ワイマール共和国の病める経済を活力に満ちた力強いダイナミックな経済へと変えた。何百万人もの人々が再び働くようになり、家族もようやく再出発できるようになった。

まさに希望の洪水がすべての工場に浸透していた。1938年、ドイツはついにヨーロッパを代表する経済大国となり、イギリスとフランスにとっては昔の敵となった。実際、ドイツでは労働力が不足し、イタリア人、フランス人、ポーランド人までもが故郷の家族を養うために帝国にやってきた！

世界平和にとって悲しいことに、国家社会主義ドイツだけが、世界恐慌のユダヤ人の魔手から自由な道歩んだ。1941年12月7日、アメリカはまだその支配下にあり、イギリスはそこから自由になることはできなかった。戦争はアメリカからのハレと厳しい配給によってのみ可能となり、戦後イギリスは戦前の不況に逆戻りした。

アドルフ・ヒトラーの業績は、都市党、経済の刷新（本物の！）福祉国家の樹立など、途方もないものであったが、それは総統の人生の最高の業績ですらなかった。1930年代、ドイツ最高の政治家は、国家社会主義は、マルクス主義の超国家を建設するためにあらゆる国を侵略する（ユダヤ人のポリシェヴィズムのような）輸出イデオロギーではないと、外国の政府首脳に繰り返し保証した。国家社会主義革命はドイツのものであり、他の退廃した富裕民主主義国家は何も恐れることはない。しかし、彼らは恐れた！ヒトラーが自分たちの上を降りてくることを想定して恐れたのではなく、ヒトラーの業績が他国で模倣される可能性があったから恐れたのだ。だからこそ彼らは、国家社会主義がむしろ有益なものであるかを世界に知られる前に、栄華を極めたドイツをできるだけ早く叩き潰さなければならなかったのだ！

アーリア人の純粋性の再興に対するユダヤ人の憎悪は、自由なドイツが国際ユダヤ人の傀儡と戦わなければならなかった世界大戦で頂点に達した。しかし、戦争のさなかであっても、ドイツの敵の優位が明らかになったとしても、ドイツのためだけでなく、新しく健全で公正な世界秩序のために戦おうと、何百万人もの人々が国家社会主義の旗を掲げた。彼らの目標は、アーリア人で統一されたヨーロッパを建設することだった。

当初、ヒトラーはそのことをあまり考えていなかった。彼はドイツが平和に暮らせるようになることだけを望んでいた。しかしその後、戦争に打ち合えないことが明らかになり、アーリア民族が丸となって世界の敵であるユダヤ人に立ち向かわなければならぬ戦いを打たなければならないことが明らかになった。小ドイツはリスボンからモスクワに至るまで、アーリア人のヨーロッパを動かす原動力となるはずだった。そうでなければ、アメリカのウォール街のユダヤ人やソ連のポリシェヴィキの手先となり、今日に至っている。

レオン・デグレル将軍はベルギーのヴァッフェンSS部隊を率いて東部戦線に赴いた。彼らは凡そアーリア的なヨーロッパにおけるベルギーの地位のために戦った。コルネリウ・コドレアヌはルーマニアの

"鉄衛団"を率いて準備を整え、スペインは共産主義と戦うために志願兵で構成された"青師団"を派遣した。

ベルギーで死闘を戦って以来、スペインで暮らしているレオン・デグレルは、ヒトラーから最高の尊敬を集めていた。1945年、ヒトラーは、もし自分に息子がいたら、レオン・デグレルのような息子が欲しいとさえ言った！

戦争末期には、総統はついに数十万の汎アリウス主義運動を作り上げた。彼らは運動を支持するだけでなく、そのために戦い、戦争末期の絶望的な期間にも、偉大なる国家社会主義の思想のために血を捧げた。ベルリンのフューラー・シッカーは、ヴァップフェン=SSの最後の外国人志願兵によって守られた。ヴァップフェンSSの志願兵たち、常に分裂していたヨーロッパを共産主義に対抗して統一するという信じがたい成果は、ヒトラーの最高の成功であった。今日、自然で、非資本主義的で、健全なアーリア人の世界秩序という夢は、世界中に信奉者を持ち、その数は今や数百万人に達している。

アドルフ・ヒトラーは間皇ではなく偉大な指導者だった。彼のアーリア民族社会主義の秩序に基づく世界平和と世界正義の概念は、我々への遺産である。すべての白人は最終的に、自分たちが兄弟であり、アフリカから押し寄せ世界を荒廃させる黒人の疫病から、イスラエル、ウォール街、ボンに居座り、白人民族が絞め殺される平和を握っている操り人形の主人から、自分たちの集団的天才の賜物、労働力、人種的優越性を守るのだけと考える必要はない。

月20日は、私たちの敬愛するアドルフ・ヒトラー総統の誕生日です。共感者、支持者、活動家の誰もが祝う中、「総統の重要な仕事を完遂するために、自分に何ができるだろうか？この徹底的に廢棄した世界のアーリア人種の生存を確保するために、私は何ができるのか？」

戦死した指導者アドルフ・ヒトラーのアーリア民族統一の夢を偲んで。 - ハイル・ヒトラー

巡礼

カティより

「運命が私の生まれ故郷としてブラウナウ・アム・インを選んだことは、幸運な運命だったと思う。結局のところ、この小さな町はドイツとドイツの国境に位置しており、少なくとも私たち若い世代にとっては、統一はどんな手段を使っても成し遂げなければならぬライフワークのように思えるのだ！」

アドルフ・ヒトラー『MEIN KAMPF』第1巻第1章

シカゴから飛行機、フェリー、列車を乗り継いで3日間、何千キロも移動したことを感じ始めたのは、ザルツブルグから列車が走り、銀色の川とジンジャーブレッドの家が絡み合う緑豊かな風景を横切ったときだった。黒と灰色の雲が原始の山々を低く覆い、そのギザギザの山頂を交互に見せたり隠したりしていた。しかし、私は幸せというよりもむしろ疲れていて、親切な宿の暖かいベッドが恋しかった。

列車が次の停車駅「ブラウナウ・アム・イン」で停車すると、私の疲労は蒸発し、アドレナリンが代謝バッテリーに補給された。この中世の町に到着することは数ヶ月前から計画していたが、車窓から初めて駅名を見たときは本当に感激した。やった！私は本当にここにいたのだ！リュックを背負い、冷たい土砂降りの中を駅から数キロの人通りの少ないリンツァー通りまで歩き、マイブラウ・ガストホーフを探した。私は幸運だった。女主人によると、ブラウナウとその周辺数キロにある他の村ですでに予約でいっぱい、その多くは数ヶ月前から埋まっていたという。「驚かないわ」と私がこっそり言うと、彼女は微笑んだ。「今月は世界中がここに集まっているのよ」。え？私は言葉が詰まった。「待っていて。そして、彼女は私を居心地のよい小さな部屋に一人残し、彼女の謎かけについて考えさせた。

夜明けに目を覚ますと、昨日の夕方雨でまだ湿った朝だった。しかし、町は活気に満ち、何世紀も前の伝統的な建築物や街並みに、現代的な商店や住宅が見事に調和していることに驚嘆した。私はリンツァー通りの端まで歩き、そこから活気ある中世のマーケット広場に入った。その南端にはザルツブルグ門があり、500年前のブラウナウの入り口を守っていた巨大なアーチがあった。反対側からは、イン川の小さな支流が道路橋を染み込んでいる。門から150メートルほど離れたところに、真っ白な大きな建物があり、現在はテナントが入居している。オーストリアの無名の町にある、実は目立たないこの建物のために、私は地球の裏側からこの町を訪れたのだ。なぜなら、ザルツブルグ郊外のこの一軒家で、世界で最も偉大な息子が生まれ、私は彼の100歳の誕生日を祝うためにこの地を訪れたのだから。

しかし、翌日、オーストリア軍の正規部隊と特殊部隊が突然、ブラウナウ・アム・イン全域を占領したことを知ったのは、私だけではなかった。橋を渡ってドイツ国境に向かう輸送ルートは遮断され、町に入る人は設立証明書を提出しなければならなかった。軍のヘリコプターが頭上を低空飛行し、何十台もの装甲兵員輸送車が市場広場を横切った。

1940年代のハリウッドのプロパガンタ映画を彷彿とさせるシーンでは、サブマシンガンを持った兵士たちが困惑した住民の間を闊歩し、ヘルメットをかぶった人影がピストルを持った将校とともに警備ポイントに陣取った。町にはポスターが点在し、ブラウナウに戒厳令が敷かれたことを紛れもないトーンで宣言している。水曜日の14:00から金曜日の9:00まで、公共の場でのデモはすべて禁止されている。二人以上で大声で話すこと、通りに集合すること、歩道でピケを張ること、ビールを配ること、スローガンを叫ぶこと、そして「不審な服装の者」さえも、オーストリアの「反ナチス」法のもと、即刻逮捕・起訴の対象となった。

独りよがりの民主主義支持者たちは、自分たちが描いた「全体主義的ファシスト」の邪悪な風刺画のように振る舞っていた。しかし、彼らの到着直前、町にはヨーロッパやアメリカ全土、さらにはオース

トラリア、南アフリカ、東洋からの「よそ者」が押し寄せた。貧しいブラウナウは観光客で腫れ上がり、緊迫した待ち時間のために雰囲気はますます重苦しくなった。あちこちで噂が流れた。狼男のコマンドーが真夜中にザルツブルグ門に鉤十字の旗を掲げるという噂が流れた。ユダヤ人の刺客が夜の街を徘徊すると信じられていた。ミラノから来たテロリストは、市長の家の前にあったシモン・ヴィーゼンタールの肖像画に火をつけるとされていた。政府軍がザルツブルグ門を封鎖し、旧市街とその禁止区域を分けしたときにも、市民の不安は和らぐことはなかった。アーチをくぐると、その向こうの通りが見えた。

夜遅くには、マーケット広場はほとんど閑散とし、兵士たちが持ち場に残っているだけだった。その一方で、パブやレストランはどこもお祝いをする陽気な人々で溢れていた。真夜中の少し前、事件が起こり始めた。バリケードのあるザルツブルガー・トーにほど近いギャン・ホテルでは、誰かがこの店一番のシャンパンを注文し、乾杯と誕生日のお祝いの声が飛び交った。私が宿泊していたマイブラウのラツケラーでは、ミュンヘンの大学生に囲まれた若い男が私の隣のテーブルに立ち、右腕を上げて禁じられた敬礼をし、声の限りに「大ドイツ帝国のために、ジーク・ハイル！」と叫んだ！ジーク・ハイル！ジーク・ハイル！」と叫んだ。誰も彼や彼の仲間を邪魔しなかった。

私一人だったので、お祝いばかり静かなものだった。私も誰もいない近くのマーケット広場へ行き、村の大きな時計の下のベンチに座った。空を見上げた。何週間も中央ヨーロッパの大部分を覆っていた雲が青れ、不気味な時計の金属音が真夜中を告げる中、星々が運命的な位置へと軌道を描いていた。この瞬間にこの場所にいること、それは言葉では言い表せない。最後の一打が永遠に響く中、私は小さなカセットプレーヤーの再生ボタンを押した。バーデンヴァイラー、彼のお気に入りの行進曲がヘッドフォンの中で鳴り響いた。

翌朝、マーケット広場は多くの期待を満ちた人々でごった返していた。みんな待っているようだった。誰を？まるで、今にも黒塗りの大きなメルセデスに乗って、直立不動で現れるのではないかとと思うほどだった。おそらく、彼らはそのようなことを期待していたのだろう。肉体の死から40年後、自分の生まれ故郷に世界の注目を集める男の、生きている魂、感銘的に目に見える存在は、より強烈になり、より力強くその姿を現した。

正午頃、イタリア人ファシストの団が群衆の真ん中に不思議な形で現れた。そのうちの一人が、圧倒的な存在感を放つ関係者たちを無視して-

話し始めた。「白人種の偉大な英雄の誕生日のお祝いを捧げます！彼が血のつながった兄弟姉妹の心の中に永遠に生きている！ユダヤの暴政を許さない！」-

兵士たちは彼と彼の仲間に向かって駆け寄ったが、驚いた見物人に敬礼を捧げるまでには至らなかった。群衆の中には、あえて敬礼を返す者さえいた。他の人々は拍手を送り、何人かはSAの古い歌「煉瓦工場と坑道の兄弟たち」を歌い始めた。警察は、この応答者たちの身柄を拘束した。

私自身のささやかな祝典は、この騒動の裏側、15世紀に建てられた美しい大聖堂、聖シュテファン大聖堂の教区教会の敷地内で行われた。まず私は、隣接する地下の戦争犠牲者慰霊碑に降り立った。壁には、ブラウナウで亡くなった人々の名前が刻まれた公の墓碑がある。部屋の中央には象徴的な兵士が横たわっており、英雄的な死に際して眠っている。北側の壁には、スターリングラードで戦死した戦士たちの名簿が掲げられている。私はここに、「それでもあなたは帰郷した！」と刻まれた花束を置いた。外の階段を上りながら、私は教区教会の前を通り過ぎ、祭壇の中央に彼の肖像が描かれた常緑樹の花輪を置き、犠牲の一番上のロウソクに火を灯した。

私が列席者のことを振り返っていると、一人の老婦人が入ってきて、祭壇のすぐそばにある私のリースと写真に気づいた。彼女明らかにその発見に心を打たれたが、リースはそのままにしておいた。他の人たちも入ってきて素直に驚いてそれを見たが、そのままにしておいた。

私は聖堂の奥へ行き、幼子が洗礼を受けた古代の洗礼盤を見学した後、混雑した市場の明るい日差しの中に戻った。このようなシンプルで静かな出来事では、あの日の深い感動と深い感銘的な体験の豊かさを伝えることはできない。月のその日まで、私は私たちの成功の見込みをほとんど疑っていた。この計り知れない大惨事-第二次世界大戦の敗北-

は、取り返しのつかないものに思えた。地球の文明にとってこの大惨事が悲しい結末を迎えて以来、この運動は前進し、挫折し、そして悪の魅惑的な力が無敵に見える時代に再び前進しようと奮闘し始めている。

しかし、その4月20日、彼の生誕100周年記念日に、彼の聖なる生誕地で、私は自分のささやかな時間枠の中で、ムーブメントの発展と進歩に対する評価を制限していた視野の狭さに、予期せぬ気づきが一歩一歩、私にもたらされた。彼のアイデアは永遠的なコンセプトである。彼が動き出した歴史的結末は、押し寄せる出来事の波であり、長い年月を経て遠く未来へと押しとどめることのできない勢いを増していこう。私たちの動きは、自然の法則を人間の領域に適用したものであり、自然は全能である。自然は全能であり、時々は反感を買い、絶望の中でその力を増幅させるかもしれない。

4月21日、当局が彼の家への障壁を取り除いた後、群衆はイスラム教徒のようにメッカの聖石の周りに集まった。私は多くの見知らぬ人々の中に入ったが、私たちは突然、己の兄弟姉妹としての絆を感じた。彼の精神は私たち全員を包み込み、私たちを同志とし、未来への自信を満ちたものにしてくれた。敵対的な世界の中で、この特別な時期に、世界中からこの場所に集まったという事実だけでも、この考えがまだ生きているという十分な証拠だった！映画『意志の勝利』で彼が言ったように、私たちを結びつけたのは「心の命令」だった。無知と邪悪に包まれた広大な夜に誕生日のろうそくを灯すという、またとない瞬間にここに集まった私たちを、未来の世代は羨むだろう。この炎からは、血縁者を照らす烽火と、後世の汚染者を焼却する火の両方が発せられるだろう。

私は、彼の思い出を称え、私の持っているわずかな祝儀を彼に捧げるためにブラウナウに来たのだ。しかし、彼は私に命よりも大きな贈り物を与えてくれた。それは、必然的で絶対的な勝利に対する、新たな揺るぎない信念であった。ハイル・ヒトラー！何千回もハイル・ヒトラー

クリスマス・ストーリー

アドルフ・ヒトラーが人民のために闘った初期においてさえ、どれほど人民を愛していたかを理解するのは難しいかもしれない。党の公式伝記作者であるハインリヒ・ホフマンは、1923年のクリスマス直前にミュンヘンで起こった洞窟で満ちた出来事を回想している。そのちょうど1カ月前、16人の同志がフェルトハーシハレの前で射殺された。運動は11月9日のクーデター未遂事件によって粉碎され、メンバーは死亡、潜伏、あるいは総統のように投獄されていた。希望の火種は消え、血に濡れ、戦後のドイツは再び社会的混乱、経済的破滅、文化的衰退という灰色の絶望の中に沈んでいった。68年前の暗黒の12月、ホフマンが語る光景の舞台はここにあった.....。

「ヒトラー運動の芸術家たちは、ブリュッテ通りのブリュッテ・カフェで、アドルフ・ヒトラーを拘束したタブローでクリスマスを祝おうと計画した。

私はヒトラーの替え玉を探す仕事を与えられた。偶然、ヒトラーによく似た男に出会った。私は彼に、このタブローに参加してくれないかと頼み、彼は承諾した。

「ブリュッテ・カフェの大ホールは人で埋め尽くされていた。幕が上がり、半分暗くなった舞台に牢屋が現れると、畏敬の念を抱くような静寂が訪れた。小さな格子窓の向こうに、舞い落ちる雪が見えた。一人の男が小さなテーブルに座り、観客に背を向けている。目に見えない男性合唱団がきよしこの夜、聖なる夜を歌っていた。

最後のメモの緊張がほぐれたとき、小さな天使がクリスマスツリーを持って独房に入ってきた。

"ヒトラー

"はゆっくりと観客の顔を見るまで振り向いた。多くの人々、それが本当にヒトラー自身だと思い、会場中にすすり泣きが起こった。

「明かりが灯り、私の周りには濡れた目をした人たちがいて、ハンカチがすぐに消えた。

出典ハインリッヒ・ホフマン著『ヒトラーは友人だった』バーク社、ロンドン。

4月20日

リーゼロッテより

世界中の国家社会主義者が今日、指導者アドルフ・ヒトラーの誕生日を祝っている。

1918年の裏切りに直面しながらも、数百万人が所属する世界観と運動を作り上げた指導者。ドイツを国際友愛の沼地から引き離し、ドイツ国民の民族意識を回復させた指導者を記念する。真の赤い鉤十字の旗の下、ヨーロッパのアーリア民族を率いて、ユダヤ人・ポリシェヴィキに支配されたアジアの大軍に對抗し、国際的なユダヤ人寄生国家と闘い、ついにユダヤ人、資本家、ポリシェヴィストの国際的陰謀の犠牲となった指導者を記念する。

国家社会主義ドイツの指導者であり、アーリア世界の指導者であったアドルフ・ヒトラーが死んだ。世界の敵であるユダヤ人・ポリシェヴィキとの戦いで倒れたのだ。彼の遺体は、12年間ドイツ国民の運命を導き、最後の瞬間まで敵と立ち向かった帝国首相自邸に安置されている。アドルフ・ヒトラーは辞任も降伏もせず、ドイツ国民の指導者としてヴァルハラに入った。総統の亡骸は、ユダヤ人によって扇動された占領軍の暴徒に對抗することはできなかった。こうして総統は、人間の仮面を剥がされたユダヤ人たちによってイタリア国民のドゥーチェに扮されたことを免れたのである。

帝国首相自邸が爆破され、ベルクホーフが破壊され、ニュルンベルク党大会場が解体された。すべての記念碑が破壊され、通りの名前が変えられ、党事務所が没収され、旗や旗印、制服、装備品、書籍が焼かれた。アドルフ・ヒトラー、ドイツ第三帝国、その偉大さと栄華を彷彿とさせるあらゆるものを、比類なき正確さで根絶やしにするために、あらゆる手段が尽くされた。

かつてわれわれの民族を偉大で強固なものにしていたものすべてが、国際的犯罪者集団の政権下で取り壊され、破壊され、一掃された今、ドイツ国民を永遠にこの犯罪者集団の子分にすることを来たと信じられていた。

血のつながりによって密接に結びついたこの寄生虫と凶悪犯の集団が、ある運動の物質的価値と象徴を破壊し、その指導者を虐殺することによって、その運動を完全に一掃したと信じているのなら、この国際的凶悪犯に言うてやろう。ドイツ国民は、投機、温情主義、虐殺によって権力を握った劣等民族の奴隷に戦わずして服従するくらいなら、滅びの方がましだと！

NSDAPは、国際ユダヤ人との対決において屈服することはなかったし、今後も屈服することはないだろう！1945年5月8日に起こったことは、当時の軍部指導部が、自国内の裏切りによってわが国に浸透した占領軍マフィアの圧力の下に従わざるを得なかった、軍部官僚の愚かな行為であった。われわれは、1945年5月8日に何がどのように交渉されたかにはまったく関心がない。私たちは、国際法や国際条約の問題に対処する必要はない。国際法や国際条約は、どうせ紙の上には存在しないゆえ、せいぜい勝者に最も有利な形で解釈されるだけである。われわれは、ユダヤ人の影響を排除しなければならない。そして最後に、われわれは、世界を二度も戦争に陥れた民族の責任を問うという名誉ある任務を遂行する神聖な義務がある。何百万、何千万の男、女、子供たちが、25年の間に二度も、無教養な人種の怨差、利益欲、世界征服の犠牲となったのだ。

同じ犯罪民族は、世界征服の計画が危うくなれば、躊躇なく第三次世界大戦を起こし、何百万人もの人々を再び筆舌に尽くしがたい不幸にさらすだろう。したがって、私たちは率直に告白する：私たちの目標は、そのような大惨事を防ぐことである。

第三帝国におけるユダヤ人問題の最終的な解決策に関する限り、ユダヤ人問題の最終的な解決策などまったく存在しなかったことに気づくには、大量の投機家、ゆすり屋、裏社会の構成員を見るだけでいい。年金生活者の巡礼や、アメリカ、ヨーロッパ、南アメリカのユダヤ人植民地は、存在しない最終解決策の生きた例である。このような状況において、私たちは真実を見つけることに興味を持つ必要はないし、「事実に基づいた議論」をする必要さえない。何のために？世間知らずのモラリストに便宜を図

るためか？

第三帝国ではユダヤ人がガス処刑されなかったという事実を証明する証人がいる。しかし、その反対を証明する信頼できる資料はない。国際赤十字からの報告も、ユダヤ人の人道的扱いに関する記述を裏付けている。しかし、われわれが再びこのような誤りに陥る可能性があると思えるということは、われわれ国家社会主義者が実地教えられる人間であるということの意味する。

今、私たちの反対者たちは、40年前と同じように、人道、人間性、寛大さについて民主主義的なフレーズの奔流で世界を攻撃し、道徳主義的なスローガンを口にするだろう。栄華を誇ったヨーロッパの文化的景観を廢墟の山と化したとき、あなたの方の人間性はどこにあったのか？東洋の何百万人もの人々が、人間以下の大軍で残酷に虐殺されたとき、あなたの方の人間性はどこにあったのか？西側では、焼夷弾や燐光弾の雨あられの中で女性や子供たちが死んだ。1945年以降、何十万人もの党の同志が殺され、他の同志は国外追放され、断罪され、廢人となった。それがあなたの方の道徳の表現だったのか？

無数のヨーロッパ人が、愛国者として、また自覚的なヨーロッパ人として、ユダヤ人・ポリシェヴィキという世界の敵との戦いに参加したために、同じ訓練を受けなければならなかった。イタリア人だけでも30万人、フランス人だけでも15万人が、ユダヤ人に扇動された暴徒によって虐殺された。数え切れないほどの人々が、今日もなお、その身体に虐待の跡を残している。

国家同胞の国際的使徒たちが、責任を問われたときに、このような共謀罪に直面してどのように弁明するのか、興味深いところだ。民主主義的な政治家たちがどのような言い回しや嘘で言い逃れをしようとしても、彼らと彼らを支持する民族はその運命から逃れることはできないだろう！

影響を受けた人々は、これが単なる言い回しで済むことを確言できる。国際ユダヤは、外見上現代化した民族の血で自らを酔わせることに成功したかもしれないが、国家社会主義の知的建造物を崩壊させることに成功しなかった。総統は戦死したかもしれないし、この運動のイデオロギー的著作は、他のあらゆるものと同様に、すべて焼却され、禁止されたかもしれない。しかし、国家社会主義は最も深いところに根を下ろし、息を吹き返したのである。たとえ指導者が肉体的に死んだとしても、その精神はより生きている。国家社会主義ドイツの指導者は、肉体的な形ではなく、彼だけが体現している国家社会主義の思想を通して、私たちの中にいるのだ。

総統は、その代表的な著作『我が闘争』を通じて、また演説やエッセイを通じて、時代を超えてわれわれが行動しなければならぬイデオロギー的、政治的、精神的基礎をわれわれに提供した。

政治体制は確立され、打倒され、政治家は現れては去っていくだろう。しかし、総統とその業績はドイツ国民とアーリア人の世界の存続の基礎となるものである！

4月30日は、大ドイツ帝国の総統兼首相が、ドイツとヨーロッパの親衛隊に守られた帝国首相官邸で、身内の裏切りや卑怯な行為によって絶望的な状況に直面しながらも、妻とともに遺言を書き残し、この世を去った日から33年目にあたる。総統の死後32年を経た今日、われわれは彼の政治的遺言を手に入れた。この総統の遺言は、彼の特徴であった先見の明と自信を物語っている。

この総統の最後の宣言が書かれてから30年後、国家社会主義運動はこの最後の意志に従って再び立ち上がった。若い世代に支えられたアドルフ・ヒトラーの運動は、その運動の意志を実行する準備ができています。われわれの運動の名において、また運動に代わって、われわれはヨーロッパの中心でこのユダヤ人「FRG」の実体を粉砕し、その支持者を根こそぎ排除する。われわれは、名誉、栄光、偉大さ、正義の第4の神聖なドイツ帝国を建設し、こうして総統の意志、すなわち国家社会主義運動の輝かしい再生を実現するのである。

我々は、アドルフ・ヒトラー閣下に対し、死後まで永遠の忠誠を誓う。われわれは総統閣下に対し、最後の意志が成就するまで、休むことなく忠誠を誓う。狂言的な決意をもって、われわれ国家社会主義者は、あなたの最後の指示を実行し、あなたの死と何百万ものアーリア人の死の責任者を裁きにかける。我々は、この誓いを破るくらいなら、死を覚悟している。

今、私たちは、あらゆる国の国家社会主義者の軍団と連帯している。彼らにはみな認識している：国際ユダヤが世界支配を篡奪し、すべてのアーリア民族が滅亡するか、アーリア民族がユダヤ人政権を排除するかのいずれかである。アドルフ・ヒトラーを指導者とするわれわれは、戦わずに自発的に排除され

ることを許さない！ドイツ国民は、国際的な暴利を貪る一団の盟主となるくらいなら、滅びることを選ぶだろう！自国の自由を絶えず守り続ける覚悟のない国家、あるいは自由のために再び戦うことのできない国家は、存在する権利を失っている！

総統は、国際ユダヤ人との対決が存在と生命の問題であることに、いかなる疑いも残さなかった。われわれの文化的記念碑の廃墟から、アドルフ・ヒトラーの運動は、ドイツの自由、ヨーロッパの統一、アーリア民族共同体のための闘争を継続するために新たに立ち上がった。今後数年で決断が下されるだろう。

われわれの敵対勢力はもちろんのこと、われわれの友人や同調者も、ひとつはっきりさせておかなければならないことがある。降伏という言葉は我々には存在しない。我々にとっては胡蝶の没落かであり、それと代わるものはない。もしわれわれが、国家の自由を求めるこの闘いに其れれば、敵対勢力の陣列は大幅に薄くなるだろう。

われわれは降伏も屈服も知らない。われわれは知っているのは、総統、人民、祖国に対する義務を果たすことだけである。総統の生と死は、われわれに狂言的な服従と国家社会主義の理念への献身を義務づけている。

「ヒトラーの業績と使命は、後世への神聖な遺産である。生きている我々には戦い続ける義務がある」
"シェールナー元帥

よりNS KAMPFRUF #25 1978年3月-4月号(89)

アドルフ・ヒトラー 自己犠牲のリーダー

マイケル・ストーム

国家社会主義は、あらゆる革命運動と同様、自己犠牲によって推進される。われわれの運動がユニークなのは、われわれの指導者が、政治権力をめぐる闘争において自己犠牲の模範を示しただけでなく、生涯を通じてそうだったからである。

ヒトラーがまだ若かった頃、彼は豊富な年金を妹のポーラに託し、日々の糧を苦勞して得るしかなかった敵対的な世界で生き延びるために立ち立った。自分のことよりも他人の必要を優先するというこの初期の例は、彼の生涯を通じて残った。

第一次世界大戦中、ヒトラーは一般兵士の悲慘さを分かち合った。彼の連隊前線に血を流して死んだ。連隊の戦力が低下するにつれ、一人一人に多くのことが要求されるようになった。ヒトラーほど多くのことをした者はなかった。彼は常に特別な任務を志願し、最も危険な任務を受け、何十回も辛うじて死を免れた。彼は自分の意志だけでドイツに勝利をもたらしたように見えた。休息と休暇を取るべきときが来ても、ヒトラーはそれを拒否し、家で家族と過ごす時間を確保するために、この休息を既婚男性に託した。

背後から刺され、屈辱的な敗北を喫したヒトラーは、ドイツの復讐とヴェルサイユ条約の破壊を生涯を捧げることを誓った。その戦いの数年間、彼は青年時代以上の苦難を経験した。

彼の服装はとても貧しく、党員が総統のスーツを寄付しなければならなかったほどだ。一銭も残さず闘争に投入できるように慎ましく暮らしていただけでなく、芸術家や建築家になるという大きな夢（と当時思っていた）も諦めなければならなかった。

党が指導者を求めたのは物質的な犠牲だけではない。ヒトラーはしばしば、ドイツ全土と結婚していたため結婚できず、居心地の良い家庭と家族の繁栄を享受できなかったと不満を漏らした。さらに悪いことに、彼は父親になる喜びを知ることができなかった。なぜなら、それは子供たちにとって不公平なことであったからだ。

戦火がドイツに及ぶにつれ、総統は都市再建の夢を断念せざるを得なくなった。総統は軍服を着て、勝利が達成されるまで軍服を脱ぐことを拒んだ。総統は24時間体制で働き続け、その仕事量は増大した。ラステンブルクの "狼の隠れ家" と呼ばれる司令部は湿地帯の森の中にあり、夏は暑く、冬は寒すぎた。総統がベルリンやパリに赴任するのを待ちきれず、総統を置き去りにしたまま、娯楽も明るい光も勝利の甘い果実もなく、ドイツのために戦った。

1945年春、総統は総統地下壕で、軍事会議中に数分間姿を消し、戦後に建設することを夢見たユニークな国家社会主義都市の模型を眺めていた。

ソ連軍の砲撃が降り注ぐ中、総統はヴァッフエンSSのレオン・デグレル将軍に、もし自分に息子がいたら、デグレル将軍のようになってほしいと語った。総統は、ドイツのために究極の犠牲を払い、逃がずに最後まで敵と戦い、民主主義者とボリシェヴィキからユダヤ人の喜びを奪い、裁判にかかるだけでなく、遺体を切り刻むと言い、「ウンターメンシェン」があつたと数メートルというところまで戦い続け、ヴァルハラに登った。

アドルフ・ヒトラーは、民族のために自らを、いや全人生を犠牲にした人物である。大義のために一人の人間を犠牲にするなど、偉大な美徳は国家社会主義の本質的な特徴である。だからこそ、1人の国家社会主義者は、100人の民主党議員や共和党議員よりも多いのだ。これこそが、われわれをこれほど

まで強くし、これほどまでに恐れさせるものなのだ。

SAの若者だった私は、工場で週48時間働き、給料の全額を党に寄付し、党本部をきれいに保ち、デスクワークを整理し、請願の署名を集め、食事を作り、テレビのインタビューを受け、時にはクズどもとストリートファイトをして楽しんだものだった。いわゆる "フェアウェザー" な国家社会主義者の大半は、労働や寄付をすることになると、なかなか見つかることができなかった。

それゆえ、彼らが殺害予告や爆破予告によって運動から追放されたのではなく、国家社会主義へのコミットメントが足りなかったからだということに、私は驚きを隠せなかった。彼らは「楽しむ」ことを望み、他の同志を犠牲者にしたのだ。このようなドローンは比較的早く党を去り、そのたびに私たちは強くなっていった。

大統領の犠牲に比べれば、私の金と汗と血は取るに足らない供物だ。数年前に命を捨てなければならなかったラインホルト・ゾンタークや、2年間獄中で過ごした（そしてまた8年ある）ゴットフリート・キュッセルのような真の国家社会主義者たち、そして、安全上の理由からここでは名前を挙げるができないが、彼らがいなければこの新聞を手にし、この記事を読んでいることもなかったであろう多くの仲間たちである。

われわれ国家社会主義者は、ただ一つのこと、すなわち、われわれの勝利のためにどれだけ自分を犠牲にするかということしか、男や女を半断しない。どれだけ賢いか（あるいはそう思っているか）、どれだけ金持ちか、どれだけ優秀な戦士だと主張しているか、どれだけビールを飲めるか、そんなことは何の意味も持たない！

私たち一人ひとりが、あなたも私も含めて、この重要な問いを自問自答しなければならぬ！

ハイル・ヒトラー

始まり

雷鳴轟く激戦がフランドルを駆け巡る。フランダー地方こうめき声が響き渡る。鎧をまとった死が野放しにされている！1918年の防衛戦では、引き裂かれた大地が震え、ファンネルやピットの上を炎が革がる。イギリス軍はコミネス近郊のモシュ高地への攻撃に失敗。アメリカ軍の暴風雨は、野原の灰色の防衛意志のわずかな岩の上に崩れ落ちる。戦車部隊はドイツの英雄主義の崖の上で自決する。

機関銃の轟音の中、榴弾砲が吼え、銃が墜落し、地雷が唸り、撃墜された航空隊の火の粉が舞い散る。血は大地を肥やし、火薬の蒸気の匂いを放ち、死者はもはや死の安らぎを見いだせない。犠牲者のヘカトームから、運命は英雄主義の記念碑と、ほとんど絶望した人類の陰惨な苦悶を積み上げる。

世界が憎悪を共謀させた。破壊だ！大砲の熱いパイプから轟く破壊の声…。

それが正面だった！

ファンネルや塹壕の穴に散らばり、連隊名簿の英雄たちが、M.G.で、ライフルを持って、かき回された土の溝に身を押し込み、血を流しながらも戦い、罵りながらも屈しない！

1918年10月19日の夕方、死と隣り合わせのフランドル上空に、死はまだ眠っていない。死はまだ眠っていない。黄赤色に燃え上がり、轟音をたてている。兵士たちは疲労困憊し、泥こまみれ、疲れ果て、飢えている。散り散りになった兵士たちがドイツ軍の塹壕から抜け出し、漏斗から漏斗へとよるめきながら後方へと駆け抜けていく：エッセンホラー！敵はさらに砲火を強める。

連隊の幕僚である三銃士が死を追っている。地形の奥のどこかに、放棄された砲兵壕がある。そこに野戦厨房があるはずだ。私たちは銃火の雨の中を跳躍する。

色とりどりのロケット弾が、前線の間をゴーストのように飛び交う。そしてついに、カートリッジケースと空の砲弾バケットに出くわした。目の前には掩体壕のブロックが建っている。調理器具がカタカタと音を立てる。野戦厨房の壕に到着。三銃士は安堵のため息をつく！

しかし、敵の砲台は再び猛威を振るう。一撃、また一撃と稲妻が土の噴水を切り裂く。泥の中から木や鉄の破片が渦を巻き、シェルターの天井で衝突する。時30分、時30分と過ぎていく。もう戻ることは不可能だ。兵士たちは壕の中でしゃがみ込んで待っている。そして、右も左も、前も後ろも、残酷な破壊技術の効果が鋼鉄の浴槽の中で猛威を振るっている。バイエルンの3人の銃士は、大砲の砲身の恣意性によって地面の穴に閉じ込められ、彼らの命はもはや彼らの勇気ある行動と自らの意志にかかっているのではなく、イギリス軍の敵を撃墜しているドイツ軍砲台の後方にいる何人かの砲兵による偶然の無駄と義務の遂行にかかっているだけなのだ。

世界大戦の前線におけるこのような時間は、全男性を必要とした。1918年10月19日の夜、フランドルのモシュ近くの半分埋まった壕の中に、この絶望を克服した一人の男、二等兵、使者、陰気な男、良き同志が座っていた。二等兵であり、使者であり、陰気な男であり、良き仲間であった。彼は4年間戦場を歩いた。ここフランダーで一度、火の洗礼を受け、それ以来、彼は苦難と死の中を勇敢なヒロイズムで駆け抜けてきた。バイエルンヴァルト、ヴィーツシャエテ、ラ・バッセ、フロメル、ソナム、ノボーム、ソワソン、ラ・フォンテーヌ、これらの困難な戦いを彼は生き抜いた。誰もが絶望したとき、彼は直立し、他の者が罵ったとき、彼は沈黙した。戦友のために立ち上がり、戦いの地獄で彼らの代わりに鋼鉄の死に立ち向かった。連隊幕僚の信号係は、弾幕によって命令を前進させなければならぬとき、彼が前へ前へと促すことを知っていた。熱い土の破壊の陰から身をひるがえしながら跳躍を始めたとき、「行くぞ！」と彼の声は固く響いた。彼は中絶質なところがよいようで、他の選手が神経をすり減らすと、彼は大きな澄んだ目で彼らを見つめた。

戦線の後方で彼らとともに貴重な休息の時間を過ごしたとき、彼はヴァーテルラントと呼ばれる愛について熱っぽく語った！彼は、勝利の自明性と、ドイツがもつてか手にするであろう運命について語った。

彼らは彼を理解できず、彼のそのような話に首を振った。しかし、それにもかかわらず、彼らは彼の

言葉の中に新しい偉大な真理のようなものを感じ取った。それは彼らを怖がらせ、無力にし、笑わせた

。いつか、ずっと後になってからだが、私のことを理解してくれるだろう」と彼はよく言ったものだ。警報が鳴り、新たな酒備が命じられると、そのような会話を終止符が打たれることが多かった。今、3人はこの崩れかけたシェルターに座っている。時間が経っても経っても、苦難は終わらない。そして突然、長い間予想されていたことだが、瀕死の手榴弾の火の粉が壕に飛び込んできた。爆発は人々を地面に押し倒し、土をかき混ぜ、衝撃で麻痺させる。壕の入り口で直撃弾が死亡したのだ。すべてが一瞬の出来事だった。

そして、この文明時代の戦争における最も極悪非道な残虐行為、ガスが目に見えない雲となって流れていく！

前方の塹壕で新たな攻撃が激しさを増す一方で、ここ壕では男たちが肺と目を蝕み、腐食性の死と闘っている。攻撃が前方で鳴り響き、壕の中では果てしなく夜が更けていく……。

夜明けに、一人の二等兵がこの戦いの戦場を転がり込んだ。数日後、病院列車が故郷に向かって走る。荷馬車の中では、撃たれて疲れ果てた兵士たちの隣に、盲目の兵士が横たわっていた。うだうだ。

戦いの巨大さの中で、健康な目で連年の自分の区画と、死が自分から生命と戦場部隊の命令を奪い取ろうと無駄な努力をした惨めな小さな漏斗畑より先を見ることができなかった彼が、今、盲人となり、見えるようになった。周りは夜だが、彼の心には聖なるものとなる炎が輝き、盲目の彼は今、この炎の光の中で、血で始まり血で終わる世界の出来事の無限の広がりを見極め、明晰さで見ている。彼は民衆の宿命の悲願を見、世界全体の苦悩と悲愴を見る。そう、彼は贖罪への道を見ているのだ！

そして、赤い薔が帝国の紋章を飛び散り、反乱の癩病のズタズタを引き裂いている間に、この男の中で意志が成熟する。この戦争で流れた血は決して無駄にはならない。より良い勝利の栄光の花輪を、ドイツはいつの日か、新しい民族の新しい旗を掲げるだろう！

それが盲目の兵士の静かな誓いであり、こうして国家社会主義運動の歴史は1918年11月9日、パセウオークの軍病院で始まった。

ある男がここを去り、ドラマーになった。彼が人々から新たなドイツ軍を結成するところでは、彼らは新たな信仰の証として腕を挙げた。古代人が指導者である公爵に敬礼するときに槍を掲げたのと同じように。

- クルト・イエセリッヒ

アメリカから帰国した総統の戦時中の同志、ルグナーツ・ヴェステンキルヒナーからの情報によれば

1934年3月、『Der Schulungsbrief』誌より。

世界大戦におけるアドルフ・ヒトラー

総統の戦線同志1914-1918レポート

1914年10月10日、私はヒトラーも所属していた「リスト」連隊とともに西部戦線へ移動した。フランドルが最初の戦闘地域となった。しかし、私がアドルフ・ヒトラーに直接会ったのは、熾烈な物量戦のさなかの1916年のことだった。私たち二人はその時まで無傷で戦争を乗り切っていた。ある晩、私たちは荒れ果てた砲台の中で一緒に横になっていたが、敵が激しく乱射してきた。そのとき私たちはガスを与えられた。砲撃は一晩中私たちの陣地を叩き続けた。すべてがうまくいったと思っていたが、早朝になって気がついた：ヒトラーは視力を失っていたのだ。ヒトラー自身、もう何も見えないと言い、痛む目を両手で押さえた。そして、彼は軍医宛に書かれた。

戦時中のヒトラーの個人的な勇気を物語るような体験を、私はまっきりと覚えている。エンペー近郊でのことだった。アドルフ・ヒトラーは進軍の際、部隊に吹き飛ばされたフランス兵が閉じ込められている森の斜面を通らなければならなかった。彼らのヘルメットは、地面の穴の縁からはみ出していた。アドルフ・ヒトラーはガラス越しに彼らを見分け、ピストルを抜き、まるで自分の後ろに仲間が来るかのように手で後方に合図し、困惑しているフランス人（12人）を陣地から追い出し、司令部で進行した。

アドルフ・ヒトラーは孤独な時間の中で、しばしばドイツの政治的将来について語った。とりわけ彼は、帝国の国家分裂、よく知られた複数国家体制に落ち込んでいた。彼が、ドイツの多数の小さな国家を、紐で吊るした紙切れに例えたことがある。どんな風が吹いても、紙切れは吹き飛ばされてしまう。しかし、一枚一枚を束ねておけば、強い風が吹いても吹き飛ばされることはない。単純な私たちにさえ、彼が何を言おうとしているのか分かった。

ルグナツ・ヴェステンキルヒナー

物質的な戦いにおいて

東部ではかなりの部隊が解放されたため、西部軍に部隊の増援を受けることになる。何年もの間、物量戦の鼓動の中でここに立ち続けた者、乾いた泥と血にまみれ、ガスから来る肺の刺すような痛みを感じ、毎日毎日、榴散弾で引き裂かれた傷跡もほとんどない者だけが、槍の火のカーテンの中を死と競争し、食欲にコーヒー水を口に含み、最高のケーキのために乾いたパンの耳を取るのだ。

バイエルン第6予備軍団に所属する予備歩兵第16連隊 通称 "リスト"
"は、ソワソンで戦っているが、人員は不足し、血と弾薬で弱体化し、7週間も新鮮なリネンを持たず、大行軍で疲弊し、雨でずぶ濡れになりながら、このまま安閑としていたいと思っていた。実際に疲弊していたが、実際には第7軍と第1軍の右翼の後ろに控える予備軍だった。

そして実際には、5月26日の夕方、彼らは右旋回へのアプローチによって前線に立ち、これから敵を巻き込むはずだった。アイレットからエスヌ川を見る。指揮官はアントン・ヴァン・トゥブフ少佐。彼はこの連隊の9代目リーダーで、5日間「リスター」を率い、師団の他の部隊を引き連れて、有名で悪名高いシュマン・デ・ダムを越えていく。

大砲が発射したガスが地表に充満しているからだ。険しい山々、ごつごつした高台、魔女の踊りの場ま

破片と炎に覆われ、木の根や枝が千切れて燃えさかる土に突き刺さっている。地雷発射機や機関銃、弾薬を所定の位置に運ぶのは、その上を歩かなければならない。そしてここでは、大小さまざまな赤熱した鉄が絶えず轟き、ヒューヒューと音を立て、空気全体が渦巻いている。連隊参謀から大隊へ、そして大隊間の電話線については言及されていない。指揮官達の領域では、信号係が頂点に君臨している。ほとんど夢を見ているような確実さで、彼は漏斗から飛び出し、穴や梁や死体の上を、そびえ立つ鋼鉄の噴水の衝撃の間を、火や土や煙の雲の間を、鋼鉄の砲弾のスズメノチの大群の地獄のようなざわめきの中を、喘ぎながらダッシュする。もし彼が、灼熱の死の混乱の中で、自分のメッセージや命令を適切な人物に伝えることに成功しなければ、指導部全体が犬になってしまう。指導者たちとともに、彼は今、この戦いの運命と結果を、頭の中に、ポケットの中に、器用さの中に、そして勇気の中に抱えている。連隊で最も疲れ知らずで、勇敢で、恐れを知らない記者が、スタッフからトップまで、大隊から司令官まで、走り回り、飛び跳ね、報告し、受言し、駈け回る。

そして5日後、連隊捕獲の前線を23キロの幅で側面から巻き上げ、勢いよく突き進み、数えた限りでは、400人の捕虜、16門の銃、100門の機関銃、4台の自動車、15台の弾薬貨車、機関兵キャンプを捕獲した。

各指導者の功績もさることながら、攻撃の見事な遂行は連隊の派遣部隊の功績に由来しないと、「I list」の名で知られるR.I.R.16のアントン・ズー・トゥブーフ司令官は語った。

1918年6月1日、連隊長にマックス・ヨーゼフ勲章が授与される。そして8月4日、新しいマックス・ヨーゼフ・リッター・フォン・トゥブーフがアドルフ・ヒトラー一等兵の胸に鉄十字勲章第一級を授与する。

W.L. ディーブル

司令塔を直撃

正午頃、信号係が新たな攻撃命令を伝える。アドルフ・ヒトラーはまたもや、臆することなく、疲れを知らず、危険な任務を遂行した。アドルフ・ヒトラーは、銃弾が飛び交う最前線まで、仲間の一人や二人のために、自ら進んで最も困難な道りを歩いた。

午前11時30分、砲兵の支援を受けて第二次攻撃が開始される。開けた地形を前進する部隊の損害はまたもひどいものだった。ほんの数人が銃剣を握りしめながら最初の敵の壕に侵入し、捕虜を奪うことに成功した。第2大隊は、先を急いだ仲間を助けようとするが無駄だった。先頭の予備役シュューベルト中尉は最初の攻撃で倒れる。

連隊長のエンゲルベルト中佐は、自ら森の北端に向かった。双眼鏡で状況を把握し、敵の侵入に最も有利な場所を偵察する。しかし、監視の目はすでに彼を発見していた。ガラガラと音を立てる機関銃掃射が彼を襲い、右と左の茂みを切り裂き、幹がぶつかり、跳ね返りが宙を舞う。アドルフ・ヒトラーとバツマン二等兵が前方に飛び出し、体を張って彼を援護する。見張りをしていた司令官は、驚いてヒトラーに尋ねた：「なぜですか？指揮官は当たり前のように、無言の握手でヒトラーに感謝した。

17日

敵の砲兵活動30分前、旅団長のグロスマン閣下は、出血多量のリスト連隊の救援命令を自ら発した。

「必ず戻れ」と最後に中佐に言った。中隊長の何人かは、この命令を受けるためにすでに連隊本部に到着していた。スペースが狭いため、アドルフ・ヒトラーとその仲間たちは、しばらくの間、壕を出なければならなかった。そして--2時過ぎ--

再びヒスノイズが鳴り響いた。連隊司令部の中央を直撃したのだ。

アドルフ・ヒトラーは真っ先に救援を駆け付けた。彼の目の前に広がる光景はぞろましいものだった。

瓦礫の下敷きになって死んでいるのは、クライトマイヤー電話軍曹、ヴァインメナウアー副官、指揮官。重傷を負ったのは、連隊の司令部事務官オストベルグ巡查、オベラー副官、マルティン副官。彼の目はまだ、憧れの司令官を探している。彼も死んだのか？その時、中佐がうめき声を上げながら後ろに倒れ込むのを目撃し、彼が「国のために尽くしたかっただけ！」とつぶやくのを聞いた。

アドルフ・ヒトラーは一跳びで彼の側にいる。同志ミッハマンも同様だ。指揮官の左手は無残に垂れ下がり、右足は血で真っ赤に染まっている。榴散弾が注動脈を貫通し、出血量が多い。この応急包帯は巧みで、その目的を果たした。

連隊の仲間

シグナラー

夜間、私はローの南部にいたIII大隊を報告書を持って2度質問しなければならなかった。報告将校のヒトラーも一緒だった。我々はピアッシュ鉄道の切通しを少しの間、歓迎の援護として使うことができた。しかし、すぐにそこを離れ、開けた場所で移動しなければならなかった。進路は2門の前線砲の横を通り過ぎた。私たちが砲台に近づくと、敵は猛烈な砲火を浴びせてきた。私たちはすぐに、照準を合わされたことに気づいた。もちろん、この弾薬の浪費は、私たちだけを狙ったものではなく、何よりも、イギリス人がその瞬間、特別な活動をしていると疑ったに違いない砲を狙ったものだった。もし私一人だったら、ためらうことなく完全に身を隠していただろう。誰も私を責めることはできなかっただろう。作成される報告書には、配備された大隊の戦闘については何も書かれていなかった。その報告が1時間かそれ以上遅れて届いたとしても、少しも害にはならなかっただろう。私の仲間は違った意見を持っていた。彼は少しも遅れることなく、魔女の大鍋から素早く出ようとした。もちろん、身を隠すあらゆる機会を利用した。

リポーターの場合、敵の集中砲火を浴びながらオープンな場所を移動しなければならぬことが多い。もちろん、恥ずかしがるわけにもいかず、ついていくしかなかった。そしてそれは良かった。私たちふたりは無傷で危険地帯から脱出できたのだから。

帰路に着くと、敵の砲撃が再び始まった。もちろん、この5月も止めることはできず、汗は滴り落ちたものの、何の被害もなく鉄道を護衛した。たどり着いた。

アラスの戦いのその後の2回の作戦期間中、私はアドルフ・ヒトラーというシグナラーを護衛として何度か任されたが、そのたびに無傷で済んだ。

この数日間、私は莫然と「あの記者は特別に運がいい」と感じていた。

最前線の同志からの報告

無名の兵士

司令官のスピーチ（状況や陣地の拡大について語った）の最中に幕が開き、ヒトラーが中に入ってきて、洞窟の高度が低いことを考慮してできる限りの敬意を表し、報告書を手渡した。司令官は演説を中断することなくそれに目を通し、信号係に退去の合図を送った。しかし、彼の背後で幕が閉じられると、少佐は演説を中断し、その直後に声を張り上げ、入り口を指差して言った。"この派遣者を派遣すれば、私の連隊で最高の将校と同じように任務が遂行されることを知っている"。

私たちは当然、この賞賛に驚いた。フォン・トゥビュフ少佐は、ごくまれに空えめな賞賛を贈る指導者として、以前から私たちに知られていた。

アドルフ・マイヤー中尉

より : SS *Leitheft*、12号、1943年

告白

我々はアドルフ・ヒトラーを信じている、
わが民族の不滅の指導者、
先見の明という唯一無二の才能、
史上最高のパーソナリティ
今日も、そして永遠に、私たちの心の中に生きている。

私たちは彼の聖なる大義を信じる、
ニューオーダーと呼ばれている、
アーリア人の運命の成就
永遠の生命の法則に従って、
地球上の私たちの種の希望と未来。

私たちは彼の動きを信じている、
彼の忠実な、分け隔てのない支持者たち、
彼の名を冠した
彼の意志の道具として、
英雄と殉教者によって奉獻された
- 救いの永遠の道

ハイル・ヒトラー

考えてみてくれ!

アドルフ・ヒトラー著(1923)

ママが年をとったら
そして君は年を取った、
昔は簡単で楽だった、
は今や重荷となっている、
彼女の親愛なる忠実な目が
かつてのように人生を見通すことができなくなった、
疲れた足が
ウォーキングの際に携帯する必要がなくなった。
そして、腕を伸ばして彼女を支える。
喜びで満ちた喜びを伴う
彼女のため泣く時が来る
最後の廊下まで同行しなければならぬ!

そして、もし彼女が尋ねてきたら、答えてあげてください、
そして、もう一度彼女に尋ねるんだ!
そしてまた彼女に尋ね、答える、
慌てず、穏やかに!
彼女はあなたを理解できない、
彼女にすべてを楽しく説明する;
その時は来る、
彼女の口はそれ以上何も求めない!

NS ケンプフループ第89号、1991年5-6月(102)

同志

アドルフ・ヒトラー作 (1916年8月14日)

どちらかが疲れたらね
もう一人は彼を見守る。
どちらかが疑いたければね
もう一人が突然笑う。

もしどちらかが倒れたら
もう1つ2つの顔文字；
すべてのファイターには申かいる
の同志たちだ

の雑木林の中にあつた。 アルトイスワルデス

アドルフ・ヒトラー著

フランドルアルトワにて、1916年春
実話に基づく

それはアルトワの森の雑木林の中だった...。
森の奥深く、血で濡れた地面に、
臥薪嘗胆のドイツ戦士
そして、彼の叫び声が夜に鳴り響いた。
何もなかった..エコーは彼のモーニングコールを鳴らさなかった...。
彼はゲームのように自由に血を流して死ぬべきなのだろうか？
孤独の中で傷つきながら死んでいくのか？

そして突然...。
右から重い足音が近づいてくる。
森の床を踏みしめる音が聞こえる...。
そして、彼の魂から新たな希望が芽生える。
そして今度は左から...。
そして今、両サイドから...

苦痛のベッドに近づく二人の男
ドイツ人とフランス人だ。
そして、両者は激しいまなざしで見つめ合う。
ライフル銃を構えて威嚇する。
ドイツの戦士が尋ねる：
「ここで何をしている？」
"助けを求める貧しい男の叫びが心を打たれた"
"敵だ!"
"苦しむのは人間だ!"

そして二人とも無言でライフルを下ろす。
そして二人は手を絡めた。
張りのある筋肉で慎重に持ち上げる
担架に乗せられた負傷兵
そして二人は一緒に森の中を運んだ。
ドイツの支局チェーンができるまでは。
「これで完成だ。これが彼の忠実な帽子だ。」

そしてフランス人は森の中に入って行く。
しかし、ドイツ人は彼の手をつかむ、
彼の困った目を見る
そして、不吉な予感を抱かせるような真剣さで彼に言った：

「運命が私たちに何をもちたらずかはおわからない、
それは星々の中で検索不能に君臨している。
あなたの弾丸の犠牲になるかもしれない。
もしかしたら、私のがあなたを砂の中に引き伸ばすかもしれない。
戦いは無差別だからだ、
しかし、それはそれとして、何が起るかおわからない：
私たちは聖別された時間しか生きられない、
人間が人間の中に自分自身を発見して以来...。
さようなら！神の導きがあらんことを

サイレント・ヒロイズム

アドルフ・ヒトラー著
1918年11月2日、パセウオーク

軽種まきで静かに休む
熱戦から生還した致命傷を負った戦士たち
血塗られた破壊の跡；
しかし、鉄のあらわれから救い出された。

そして無口で真面目、義務で縛られている、
思いやりのあるソフトで優しい女性の手
感謝する戦士たちは、最後には
すでに死と生を賭けている。

彼らの忠実なケアは、健康的である。
すべての心、すべての深い傷
疲れがちな目が優しい表情となる。

そう、それが真のドイツ人女性なのだ。
愛する人が永遠に別れるのを見る
そして、他人の苦しみのために軽快に人生を捧げる。

フォレスト・オナー墓地 歩道

アドルフ・ヒトラー著
1918年11月11日、パセウオーク

あなたは私たちのためにそれに値する、
あなたをそこに埋葬する
ジャーマンオークが墓の陰になるところ。
自由、力強さ、生命の象徴である彼女
最も美しいジュエリーであること
あなたの墓の周りに与えられた。
ドイツの森には、ドイツの精神が息づいている、
静かな木立の中で、静かに休む、
千年後、数千人が彼を称えるだろう、
深い森の奥へ入ってこよう、
君たちの墓があるところに行こう、
そして、そのステップを抑制する、
あなたは私たち全員に語りかけているのだから、
だから、肉体が朽ち果てて久しいのに、永遠に生き続ける。

無線監視について

アドルフ・ヒトラー著
フランドル、1917年7月29日

夜は黒く、風はやわらかくやさしく吹く。
枝の間から、深い静けさが辺りを支配している！
遠くから、機械がビートに合わせてうなる。

同志は隣のテントで寝る
そして家にいる愛する人の夢を見る、
ただ一人、装置の前に座っている
そして闘技場に耳を傾ける。

だから私は一晩中座って待っている。
そして翌日、深い幸福感を感じる、
偵察隊の報告チャンネルで私に報告するとき、
彼は敵地から無傷で帰還した。

『青白黒赤』

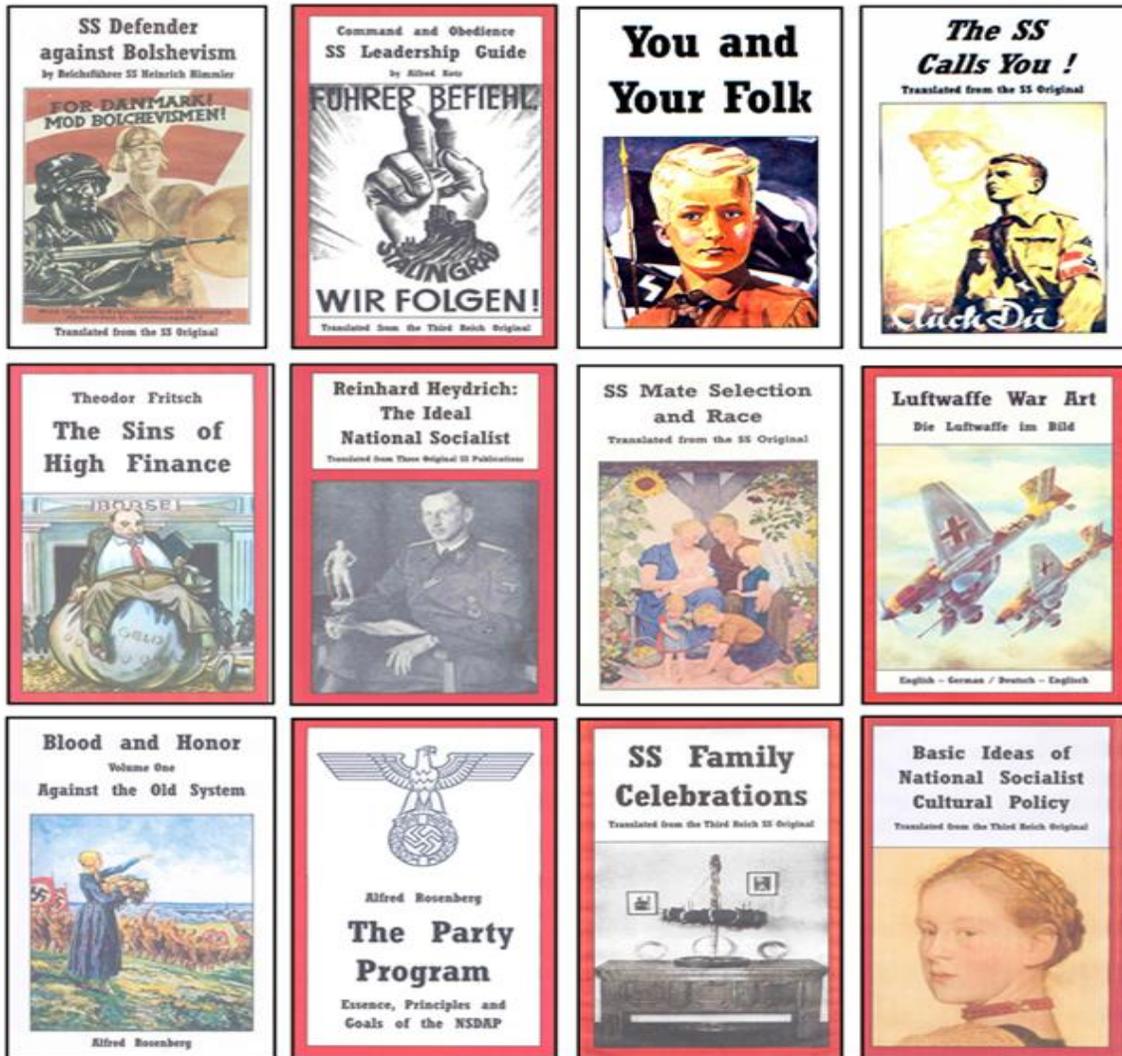
アドルフ・ヒトラー著
[西端戦線] 1917年8月4日

敵軍に包囲された、
海の数のように数え切れない、
フランス人、ルース、ブリット、
と小さな吠え声。

そして我々は熱い戦いの中で
国旗を見守る
死ぬまで忠実
青白、黒白赤

何百万人もの人々が立ち上がっている、
タワーを倒さないようにね
彼らはここに助っ人を引っ張ってきた、
紅海から黄海へ。

しかし、素直らしく反抗的で強い、
骨髄を監視する、
死ぬまで忠実
青白と黒白赤。



Hundreds of books Translated from the Third Reich originals!

RJG Enterprises Inc.
PO Box 6424
Lincoln NE 68506 USA
www.third-reich-books.com